

大阪市下水道科学館インフォメーション

「夏休み水と環境の教室」を開催しました

今年の8月23日(日)、「夏休み水と環境の教室」を開催しました。このイベントは参加者が「下水道」だけでなく「水環境」について考えるきっかけにしてほしい、子どもたちの夏休みの自由研究などに役立ててほしいという思いから、多彩なメニューが盛り込まれました。

下水道分野では、顕微鏡を使った下水処理で活躍する微生物の観察や、サイフォンや表面張力の原理といった水の性質を体感する実験を行いました。下水道科学館各階の展示物を問題とした下水道クイズでは、全問正解の方にはダーツゲームにチャレンジしていただき、すてきな景品をプレゼントしました。



水環境分野では「新エネルギーを学ぼう」をテーマに、果物発電や燃料電池などの実験を開催。地球にやさしい新エネルギーについて学び、エネルギーの不思議について関心を高めていただきました。また、「水の浄化実験を体験しよう」では、米のとぎ汁にシジミを入れる浄化実験を行い、シジミが持つ水をきれいにする力や役割について説明しました。

このイベントは、大人も子どもも楽しみながら「下水道」「水環境」について考える、良いきっかけとなったと確信しております。当日の準備や運営についてご協力いただいた、NPO法人「下水道と水環境を考える会・水澄」の皆様には、この場を借りてお礼申し上げます。

今後も工夫をこらした各種イベントを予定していますので、皆様の参加をお待ちしています。

※イベントの情報についてはホームページ等でお知らせします。



- ◆所在地 〒554-0001 大阪市此花区高見1丁目2番53号
- ◆電話 06-6466-3170
- ◆FAX 06-6466-3165
- ◆開館時間 午前9時30分～午後5時 (入館は午後4時30分まで)
- ◆休館日 毎週月曜日(月曜が休日の場合は翌日、年末年始)
- ◆入館無料 ◆無料駐車場あり
- ◆大阪市下水道科学館ホームページアドレス <http://www.city-osaka-sewerage-museum.or.jp/>
- ◆アクセス
 - ・阪神電鉄「淀川駅」下車 徒歩約7分
 - ・地下鉄「野田阪神駅」下車 徒歩約15分
 - ・JR西九条駅から市バス82号「高見一丁目」下車すぐ
 - ・JR東西線「海老江駅」下車 徒歩約15分



Merとは

「Mer(メール)」とはフランス語で「海」を意味する言葉。命を育んだ海と、メッセージを伝える「メール(Mail)」の音を重ねています。この冊子では、これからも水という大切で身近な存在を通して、私たちの暮らしと未来について考えていきます。

人と地球のうらおいマガジン・メール2015年10月号
発行 一般財団法人 都市技術センター
〒541-0055 大阪市中央区船場中央2丁目2番5号-206
船場センタービル5号館2階
TEL 06-4963-2056
<http://www.uitech.jp/>

清流紀行……………P02
「明神川」(京都市)

ガイアの瞳……………P04
「減災に向けた舞台裏」

水人之交……………P08
「東横堀川から水都を支える
e-よこ会の取り組み」

大阪府内の下水道情報……………P12
センターだより……………P14

清流紀行

社家町を行く清めの川

明神川(京都市)



京都市の上賀茂伝統的歴史物群保存地区に指定されている社家町

京都の上賀茂神社の東隣にある社家町。上賀茂神社から流れ出る明神川に沿って、切妻造りの主屋や土塀、門、小橋が連なる光景が、歴史的情緒を感じさせます。

明神川の水は、社家町から約2km北に位置する賀茂川の明神井堰から導かれています。明神川の水は農業用水として田畑を潤しながら南流。やがて上賀茂神社へ入ると、御生所川、御手洗川と名を変え、古くから人を清めるために用いられてきました。境内には北東に鎮座する神山から流入し、神事に使用する祭器を洗い清める御物忌川も流れており、御手洗川と合流して「ならの小川」となります。この川は葵祭では斎王代がみそぎ神事を行い、夏越大祓では人々の罪や穢れが書かれた紙の人形を流す人形流しが行われる舞台としても知られています。ちなみに、小倉百人一首に収められている藤原家隆の「風そよぐ ならの小川の 夕暮れは みそぎぞ夏のしるしなりける」の古歌は、ならの小川で行われる夏越大祓の情景を詠んだものです。

上賀茂神社を出た「ならの小川」は、再び明神川の名に戻り、社家町の側を東流します。この地域の社家とは上賀茂神社に仕える神官の屋敷を指し、室町時代から門前集落として発展してきました。明神川は上賀茂神社と社家を結ぶ神聖なものであり、川沿いの社家では、明神川の水を邸内に引き入れ、生活用水や遣水として使用。その後は再び明神川へ戻るのがしきたりとなっています。



藤原家隆の歌碑

現在、社家町で唯一、一般開放されている西村家庭園では、明神川の水を曲水の宴のための小川とした庭園を見ることができます。また、上賀茂の名産「すぐき」は、約400年前から各社家の屋敷



上賀茂神社の境内では「ならの小川」と呼ばれます。内では栽培されたのが始まりとされており、明神川の水で育まれた「すぐき漬け」が、公家などの上層階級へ贈答されていました。

上賀茂神社から社家を眺めつつ、明神川の側を歩いていくと、社家町の東端にある藤木社と、その神木であるクスノキの大木が見えてきます。この樹齢500年と伝わる巨木を過ぎると、明神川は住宅地へと入っていき、賀茂本郷地域の農業用水となった後に、再び賀茂川へと注ぎます。この美しい明神川を守るため、社家の方、農家の方が毎年の定期的な清掃活動を実施。また、台風などの影響でゴミが流れ着くたびに、地元の方が清掃を実施。毎年6月頃にはホタルが舞う、清流が保たれています。

清めの川、風情の川、生活の川、農業の川。京都の歴史に寄り添い、さまざまな役割を担う明神川は、今日も多くの人に守られ、愛されながら、その清冽な水をたたえています。



場所/京都市北区上賀茂藤ノ木町 周辺
アクセス/市バス「上賀茂神社前」下車徒歩約2分

減災に向けた舞台裏

東日本大震災のような地震や津波、ゲリラ豪雨に代表される異常気象。私たちの安心・安全を脅かす災害に対する取り組みは、どのように行われているのでしょうか。

ガアの瞳



災害情報のさらなる共有化

2013年に総務省が発表した「災害情報伝達手段の整備に関する手引き」によると、東日本大震災では津波警報や避難情報を得た人の約半数は、防災行政無線から情報を入手したと報告されています。しかし、無線の音声を聞き取れなかったと回答した人も多く、音による情報発信は聞き逃すリスクや再確認が難しいという指摘もされました。このため、防災行政無線の有効性を再確認しながらも、より確実に多くの人が災害情報を入手できる方法が検討されるようになり、現在、多くの自治体でインターネットやSNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)を活用した手法が開始されています。

2012年に大阪府と株式会社ウェザーニューズが開始した「おおさか減災プロジェクト」も、インターネットを活用した事例のひとつです。これは大阪府内にいる利用者自らが情報提供者として、身近な気象の変化や災害時の被害状況などを、パソコンや携帯電話などから画像とともに投稿できるというもの。投稿された「減災レポート」は、減災プロジェクトマップ内に表示され、誰でも閲覧できるようになっています。また、大阪府が提供した府内約



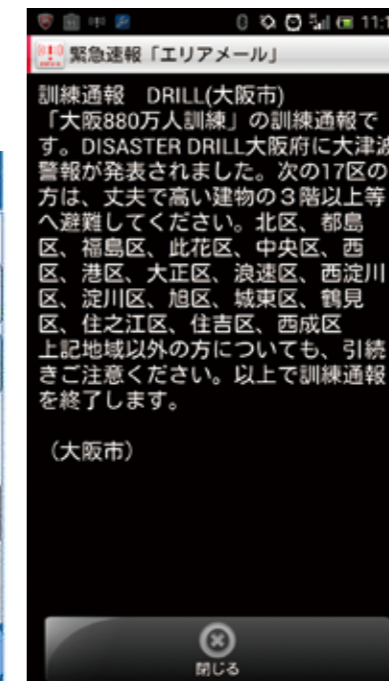
おおさか減災プロジェクト画面

2,500カ所ある避難所の情報も掲載されており、自宅以外の場所で災害に遭遇しても、閲覧者は避難経路を確認することができます。

気象災害時に被害情報などを共有できるおおさか減災プロジェクトには、自分の身は自分で守る「自助」、お互いが助け合う「共助」の意識を高める狙いもあると指摘するのは、大阪府危機管理室の脇川さん。「災害時には行政機関や消防、自衛隊による公助が重要ですし、私たちも備えを進めています。しかし、災害を完全に防ぐことは

できません。そこで大切なのは、被害を最小限に留める減災という考え方。おおさか減災プロジェクトを通じて、日ごろから災害への関心を持つことが、いざという時に役に立つはず」と話します。災害が起きたとき、道路の切断や家屋の倒壊などがあれば、消防や自衛隊などの到着には、時間が要する事態も想定されます。6,400人以上の死者・行方不明者を出した阪神・淡路大震災では、倒壊した建物から救出された人の約8割が、家族や近隣の人によるものだったという調査結果もあります。脇川さんは「これからも、おおさか減災プロジェクトへ積極的に参加していただければと思います。また、自助・共助の意識を持ってもらうという意味では、毎年行っている大阪880万人訓練も有効活用してほしいですね」と続けます。

大阪880万人訓練とは、南海トラフ巨大地震が発生し、その3分後には大津波警報が発表されたという想定で、大阪府内にいる人を対象に緊急速報メールやエリアメールの一斉配信、防災行政無線からの放送が行われる訓練。基本的に府内にいるすべての人が対象で、携帯電話はマナーモードにしても強制的に音が鳴る実践的な訓練であることが大きな特長です。「他の自治体では、事前登録をした人を対象にするシェイクアウト訓練が実施されているようですが、大阪880万人訓練のような半強制的に情報を配信するという訓練は珍しいと思います」と脇川さん。4回目を迎えた今年の訓練でも、多くの学校や企業などで、災害発生時の行動の確認や、持ち出し品の準備、地震が発生したときの連絡方法や会う場所の確認などが行われました。



映画「ミッション:インポッシブル/ローグ・ネイション」とタイアップした大阪880万人訓練のポスター

「大阪880万人訓練のほかにも、夜間の土砂災害を想定した訓練、職員のオペレーション訓練など、年間を通じてさまざまな訓練を実施しています。やはり積み重ねが大切ですから」と脇川さん。南海トラフ巨大地震の被害想定では、迅速な避難が行われることで、死者数が13万3,000人から7,900人に軽減されると言われています。いざという状況で命を守るには、日ごろからの備えが大切です。

緊急時に備えて「つながる」を推進

住民の自助・共助に対する意識を高める取り組みが進む一方、大阪府や府内市町村では、より迅速な公助を行うための整備も進められており、そのひとつが、防災行政無線の再構築です。

平成8~10年に整備した防災行政無線設備は老朽化のため、平成26年度に再整備工事が完成。現在、多重回線・260MHz帯移動系回線・衛星回線で構成されています。無線回線により、有線電話等の途絶時でも通信を確保できます。また、気象情報の伝達はファックスからパソコンを使った伝達に切り替わり、高所カメラ・津波監視カメラの映像の共有化、テレビ会議システムも導入。停電時における自家発電の稼働時間が48時間から72時間に延長なども実現しました。

大阪府危機管理室で防災行政無線を担当している豊嶋さんによると「緊急時には膨大な情報量を扱うケースも考えられます。ネットワークは強化されていますが、支障が起きてはいけませんので、大阪府と府内市町村との

通信状況は、大阪府庁の統制室で管理しています」とのこと。この統制室を含む防災情報センターには、災害対策本部機能が備えられており、壁一面には気象情報や高所カメラの映像などを表示する大型ディスプレイ、対策班や統括班などの活動スペースなどが用意されています。

また、室内には府内全域の大きな地図や、府内各地の被害状況を書き込めるホワイトボードも設置。「必要な情報はパソコンや大型ディスプレイの画面に表示されますが、緊急時には、振り向けばそこに情報が記入されているホワイトボードも便利です」とは大阪府危機管理室でシステムを担当している村尾さん。最先端の機能を備えながらも、自由度の高い「アナログの利点」も取り入れ、災害発生時には即座に行動する準備ができています。防災情報センターからは、平常時の静けさにあっても、緊急時に向けた緊張感が伝わってきます。

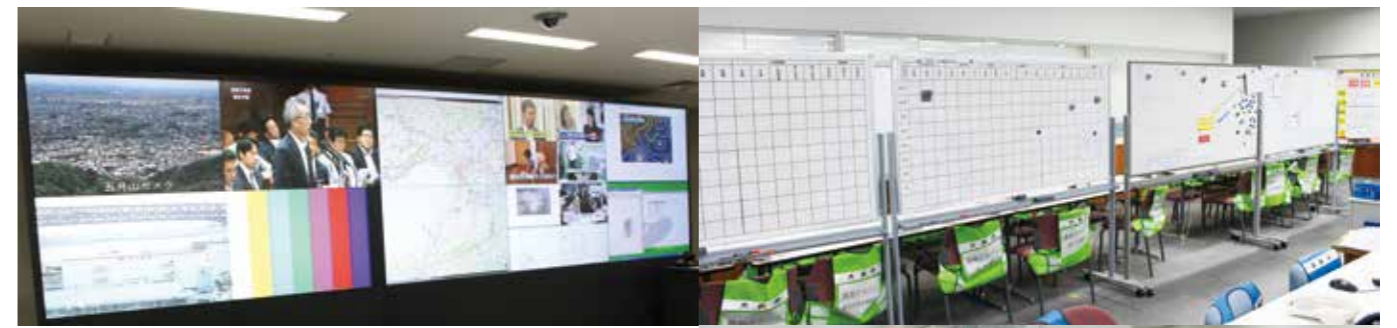
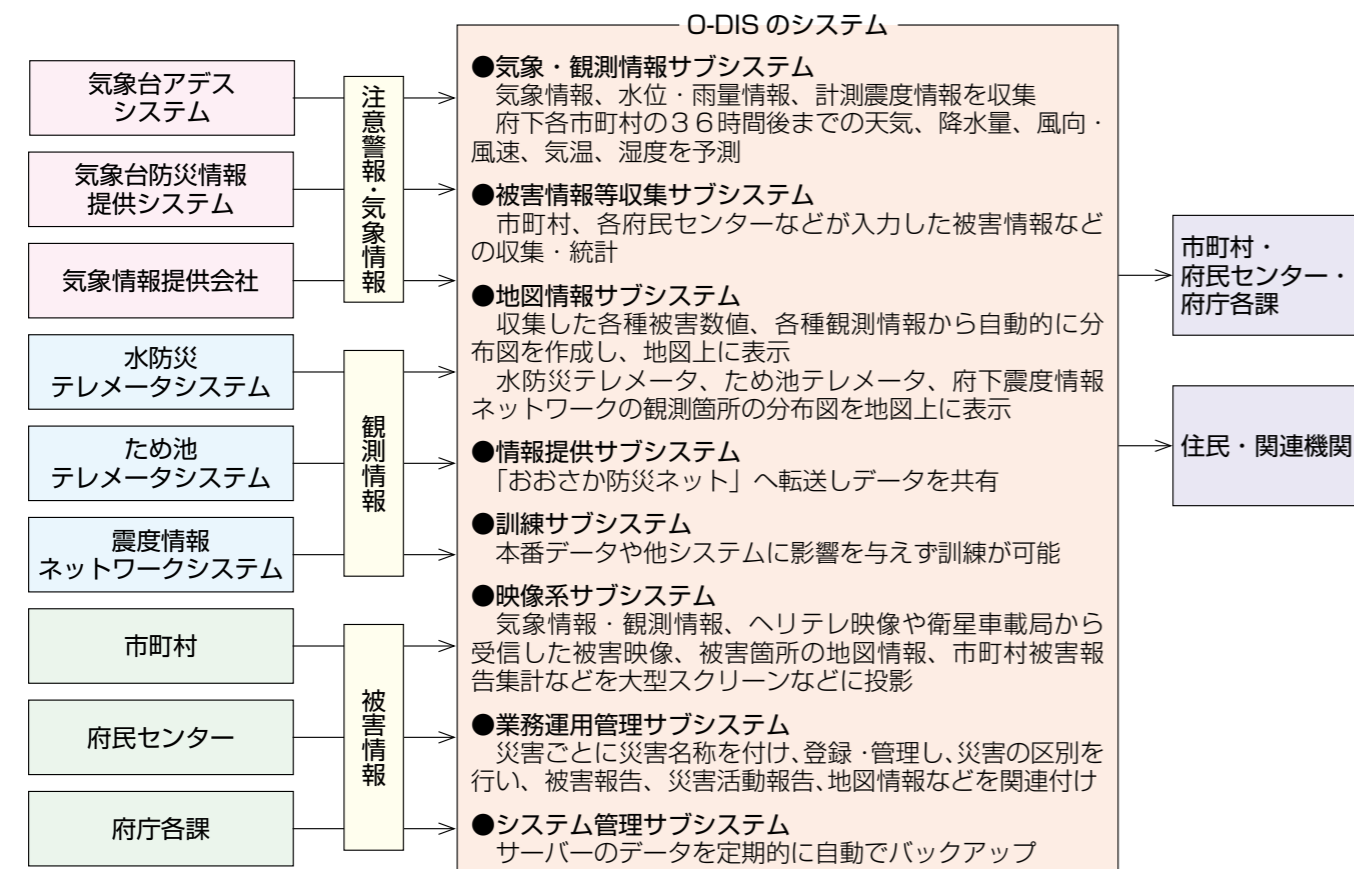
迅速な情報収集と整理

災害時の対策活動や住民の避難行動には、確実な情報が必要です。そこで大阪府では、関係機関からの情報を収集し、即座に集計する大阪府防災情報システム(通称O-DIS: Disaster Information System of Osaka)を採用しています。

O-DISは8つのサブシステムから構築されており、災害が発生すると、気象台などの注意警報や気象情報、水

防災テレメータシステムや震度情報ネットワークシステムの観測情報、市町村からの被害情報を収集。府下各市町村の36時間後までの気象予測や、被害情報の地区別集計や府全体での合計値を自動計算する機能を有しています。また、各種の被害数値や観測情報は自動的に分布図や地図上に表示。一元化された府内43市町村の情報は、被害状況の取りまとめや対策に向けた意思決定に役立てられます。

O-DISは自治体間での情報共有に使用されるだけでなく、府民への情報発信力の強化や情報共有体制の充実を目的に整備された「おおさか防災ネット」へ情報を転送し、データ共有を図っています。おおさか防災ネットはポータルサイトと防災情報メールの2つからなり、ポータルサイトでは、注意報や警報といった気象に関する情報のほか、災害発生時には各市町村から出される避難勧告や避難指示、被災状況、交通・道路・ライフラインの運行・稼働状況などの情報が発信されます。一方、防災情報メールは携帯メールアドレスを登録した方へ気象警報や注意報のほか、避難勧告や指示状況、避難所の開設情報などをメールで配信するサービス。登録時に入手したい情報や地域を自由に選択することが可能で、現在17万人が登録しています。「災害時に行動するには、まずは情報を得ることが重要です。テレビやウェブサイトもありますが、メールは自分から見にいなくても情報が届く手段。メールの登録は無料ですし、ぜひ活用してほしいですね」



大阪府の防災情報センター
上:さまざまな情報を表示できる大型ディスプレイ
右上:被害状況を書き込むホワイトボード
右:各班ごとのテーブルが準備されています

とは村尾さん。また、脇川さんは「大阪府民だけでなく、他府県在住の方でも、親や兄弟が府内に住んでいるという場合でも、登録してもらえれば、もしものときに役立つのでは」と話します。

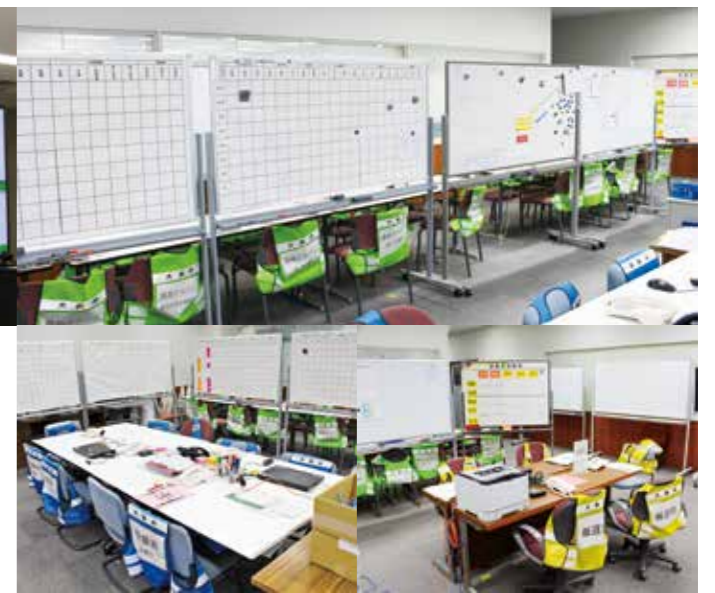
減災への取り組みは終わらない

ハード面の整備が進む一方、大阪府では災害発生時の職員の出勤体制なども確立されています。「私たち危機管理室の職員は、大阪府内で震度4以上の地震の発生または大雨・洪水警報が発表されると、勤務時間外であっても自動的に参集するといった体制が取られています」と脇川さん。また、豊嶋さんは「参集する班は順番になっていますが、休日であってもなかなか心が休まらないのが正直な気持ち。中には就寝中に雨が降ると、心臓が動悸して目が覚めるという職員もいるくらいです」と話します。

大阪府内は広域にわたり、南北で気象状況が異なることも多々あるため、職員の皆さんも防災情報メールに登録しています。「私たちが登録しているものは登録の区分が一般の方と違っており、受信したメールに返信できるようになっています。それにより、何人がメールに気づいた



おおさか防災ネット画面



かを集計しています」と村尾さん。さらに「私の場合は、一般の方にどのような情報が流れているのかを把握するために、府民としても登録しています」と話します。

IT技術を活用したネットワーク体制や、日ごろからの動員体制を持つ大阪府。今後の防災体制について村尾さんは「次は国が進めているLアラート(災害情報共有システム)を活用することで、情報発信力がさらに高まるのでは」と予想しています。

Lアラートとは、地方自治体やライフライン事業者などによる公的な情報発信者と、放送事業者や携帯電話会社、新聞社といった情報を住民に直接伝える団体を結ぶネットワークシステムです。現在、すでにNHKではデジタル放送のdボタンを押せば、Lアラートから届いた情報が表示されるようになっており、今後、参加する業者が増えると予想されています。「O-DISの情報はおおさか防災ネットにリンクしていますが、Lアラートを活用してテレビなどの媒体とリンクすることができれば、さらなる情報提供を実現することができるのでは」と村尾さん。万が一に備えた取り組みは、日々続けられています。

確実な情報をより多くの人へ伝える。伝達手段が増えた現状について、「正直、大変ですよ。おおさか防災ネットのほかにツイッターやフェイスブックなどもありますし、以前よりも確実に作業量は増えています」とは脇川さん。それでも「携帯電話の普及した現代において、インターネットの活用は有効な手段ですから。ただし、全ての人々が携帯電話を所持しているとは限らない。だからこれからも広報車による呼びかけが無駄ということにはなりません。大切なのは情報を多重化し、情報を得られない人をなくすこと」と話します。

災害被害を最小限にするには日々の積み重ね。大阪府をはじめとする自治体では、今この瞬間も「もしもの状況」に対応すべく準備が進められています。

水と交

すいじんの
まじわり

東横堀川から水都を支える

～「e-よこ会」の取り組み～

北浜から南に向けて、大阪市の中心部を流れる東横堀川。豊臣秀吉によって開削された大坂城の外堀で、市内最古の堀川です。この沿川地域で、川を生かしたまちづくりに取り組む「東横堀川水辺再生協議会（略称：e-よこ会）」の活動を紹介します。



都市の裏側に隠れた東横堀川

東横堀川は商人のまちとして栄えた船場と、大坂城の武家町であった上町の間を流れています。川の中ほどに架かる本



パルテノン神殿を思わせる阪神高速道路の柱

町橋は、現役の橋としては市内最古。江戸時代には高麗橋、農人橋とともに、幕府が直接管理した公儀橋であり、改修にあたっては徳川幕府の金蔵から出資されるなど、交通の要衝と位置付けられていました。現在も高麗橋の東詰には、京街道や中国街道などの諸国へ向かう起点となった里程元標りていげんびょう跡の石碑が残っています。

昭和の初めまで、沿川には商家の土蔵が建ち並び、荷物船が行き交っていた東横堀川ですが、戦後になりその姿を大きく変えていきます。工業化の進展で水質が大幅に悪化。泥水のような川からは異臭が立ち込め、人々はまったく川に近づかなくなりました。

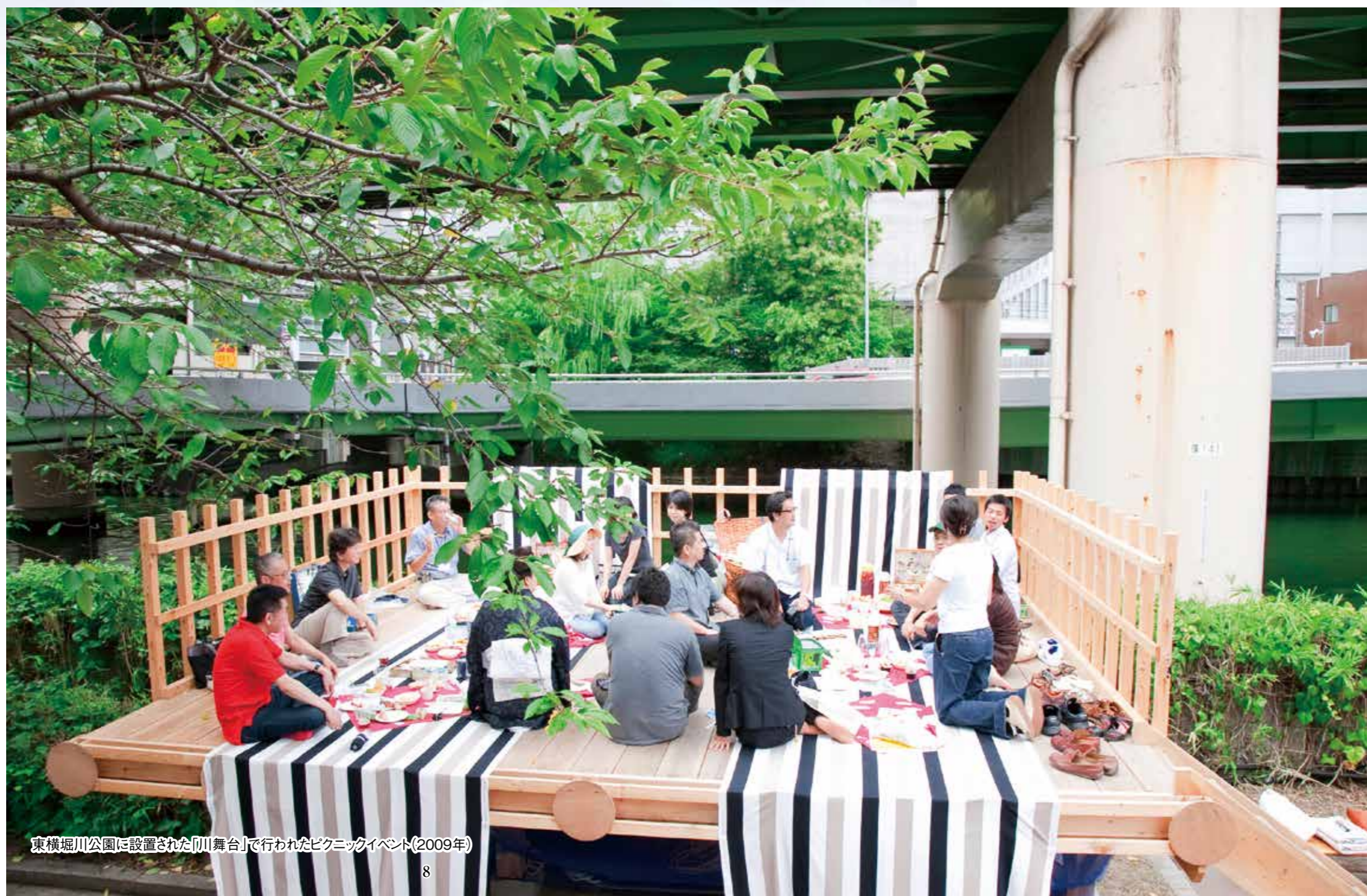
さらに高度成長期を迎えた昭和40年には、川を覆うように高速道路が建設されます。両岸には背の高いコンクリートの護岸が整備され、川は人々の視界から遠ざかることに。こうして、東横堀川は時代とともに人々の生活から離れ、都市の裏側に隠れてしまいました。

平成18年「e-よこ会」が活動を開始

大きな転機となったのが、平成15年の「水の都大阪再生構想」でした。府・市・経済界のオール大阪による、水の都・大阪再生の取り組みが始まったのです。八軒家浜船着場やとんぼりリバーウォークの整備、中之島公園のリニューアルなど公共事業を中心としたハード整備を進める一方、沿川の住民らによる、川を生かしたにぎわいづくりを推進。各所で活動が始まるなか、大阪商工会議所が平成18年に「東横堀川・水辺の魅力向上プログラム」をまとめ、地元の連合町会に働きかけました。

そして平成18年7月24日、天神祭のどんどこ舟の音が響く東横堀川のほとりに、住民やこだわりショップのオーナー、地元企業が集結して「e-よこ会」が発足。「e-よこ」の略称は、東 (east) 横堀川の頭文字から、メンバーが考案・命名しました。

「「e-よこ会」の運営に携わる中心メンバーは14人で、会員は不特定多数。イベントなどに来てくださった方、皆さんが会員なんですよ」と話すのは、同会副会長の澁谷



東横堀川公園に設置された「川舞台」で行われたピクニックイベント(2009年)



水辺の魅力を語り合うピクニックミーティング



川舞台で行われた能の公演



東横堀川で楽しむ小型船クルーズ



e-yokochoの活動を紹介する広報物

善雄さん。イベントに参加して「e-yokocho」の取り組みに興味を持ち、運営を手伝うようになった人もいます。会員という縛りがなく自発的に関わることができるため、雰囲気はすごく良いといいます。また、イベント時には企業からスイーツの差し入れが届くなど、住民だけでなく企業や店舗も巻き込んだ、一体的なまちおこしが展開されています。

「『e-yokocho』には、私のように船場で生まれ育った者もいれば、外からやってきたショップのオーナーなど、いろんな職業・立場の人間がいます。でもここでは社長も肩書きも一切関係なし。意見があれば誰でも自由に発言できる、それが船場のええところだと思います」と濹谷さん。さまざまな年齢・職業の人が集まれば、意見の食い違いがあるも

のですが「e-yokocho」では、「ええやんその企画、やってみようや」となるそうです。そして「失敗してもしゃあないやん」と。



「e-yokocho」の主な活動は、季節ごとに水辺を楽しむイベントや年1回の橋洗い、東横堀川に架かる大正2年に完成した市内最古の現役橋・本町橋へのフラワーポットの設置などがあります。中でも、春に開催される「e-yokocho」は、まちをあげた文化祭で、発足当時から継続して行っています。

「e-yokocho」は、東横堀川界わいにある、まちのミュージアム（企業の資料館など）やレストラン、カフェ、ショッ

プが主催するさまざまな企画を、水辺を逍遥（そぞろ歩き）しながら楽しむイベントで、約1カ月にわたって開催されます。クルーズやまちあるきのほか、様々なワークショップなど、東横堀川を起点に、まちの資源を存分に生かした企画が盛り沢山。パンフレットも企業の協賛を得て自らで制作、今年は7,000部も発行したそうです。

濹谷さんによると「e-yokocho」の内容を企画するにあたって、最初は企業の資料館や史跡など、まちのミュージアムを探るところから始めたそうです。さらに、それらを巡る途中にある店舗へ参加を呼びかけて、いろんな体験イベントを盛り込んでいきました。そのとき濹谷さんは、地元の人にとっては「当たり前」の中に、外から見れば魅力的なものがあると気付かされたそうです。東横堀川はもちろんのこと、数多くの老舗や史跡、船場ことばしきたりなど、まちの歴史について語るができる人もたくさんいました。

それが、活動のひとつである「e-yokocho ソーシャルカレッジ」につながっていきます。東横堀川界わいの歴史・文化・魅力を、店主や宮司といった、まちにゆかりのある講師から学ぶ講座で、当初は月1回開催していましたが、現在では「e-yokocho」に集約。まちの魅力を再発見し、未来に受け継ぐ意義深い取り組みであり、今後も続けていくそうです。

念願の船着場がオープン

今年5月、本町橋の北側に、東横堀川で初となる船着場が完成、水辺とまちをつなぐルートがようやくできました。

「これまでは、川からまちへ上がる術がなかったにもかかわらず、e-yokochoは9年間も水辺を活かした活動を盛り上げてきました」と話すのは、発足当時から「e-yokocho」の活動を見守ってきた同会議所の中村裕子さ



「本町橋」の側に、平成27年5月、船着き場が誕生しました。



多くの人が参加する橋洗い

ん。また「他の地域では、よそから来た人がまちおこしに関わることに反発も多いのですが、船場の旦那衆は心が広いので続いできたのだでしょう」とも。

船着場が完成したことで、これまで以上に企画の幅が広がりそうです。



本町橋を彩るフラワーポット

「今までは東横堀川そのものをあまり利用できなかったのですが、他の船着場と結ぶクルーズを企画するなど、今後はもっと川と密接に関わっていきたい」と力強く語る濹谷さん。すでに船着場の運用や船を使ったイベントなどについて話し合いを進めているそう。本当の意味で、東横堀川を使った「e-yokocho」のまちおこしは、ようやくスタートに立ったと言えるのかもしれない。



東横堀川に面する日本経済新聞社 大阪本社ビルでは、川に向かった公園に建替え時に階段状のアプローチ部を建設。e-yokochoの理念が生きています。

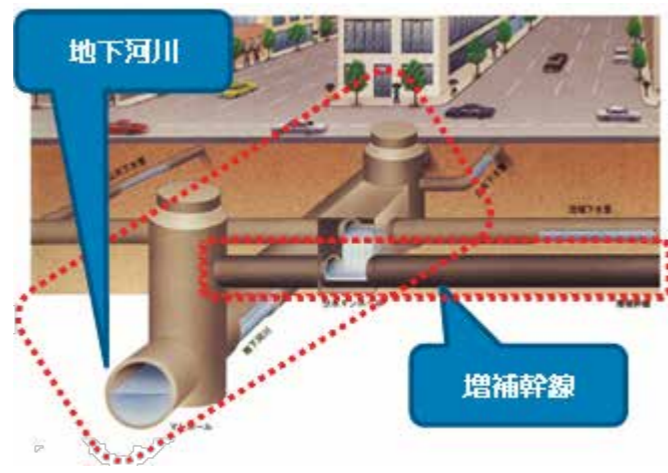
寝屋川・門真・大東地域の浸水対策を強化!! ～ つながる「地下河川」と「下水道」 ～

大阪府では寝屋川流域における浸水対策として、河川と下水道が一体となり総合治水対策を進めています。

このたび、寝屋川北部地下河川門真調節池が完成、平成27年6月30日に下水道増補幹線と一つにつながり、雨水の貯留能力が大幅にパワーアップしました。

これにより寝屋川市、門真市、大東市にまたがる約1,100ヘクタールの区域の浸水対策がおおむね完成し、浸水被害が減少します。今年7月17日の台風11号では、本流域でも1日に200mmを越える降雨が記録されましたが、寝屋川北部地下河川で約17万立方メートルの雨を貯留し、目立った浸水被害が発生しないなど、さっそく効果を発揮しました。

今後も現在工事中である大東四條増補幹線など、残る対策施設の整備を進め、一層の浸水対策を図ります。



【地下河川門真調節池】

- 延長：2.9キロメートル
- 内径：5.4メートル
- 貯留量：約7万立方メートル(※)
- ※例えば標準的な小学校のプール(約360立方メートル=幅12m×長さ25m×高さ1.2m)約194個分の水を貯留できる容量です。



合流式下水道改善施設供用開始(岸和田市)

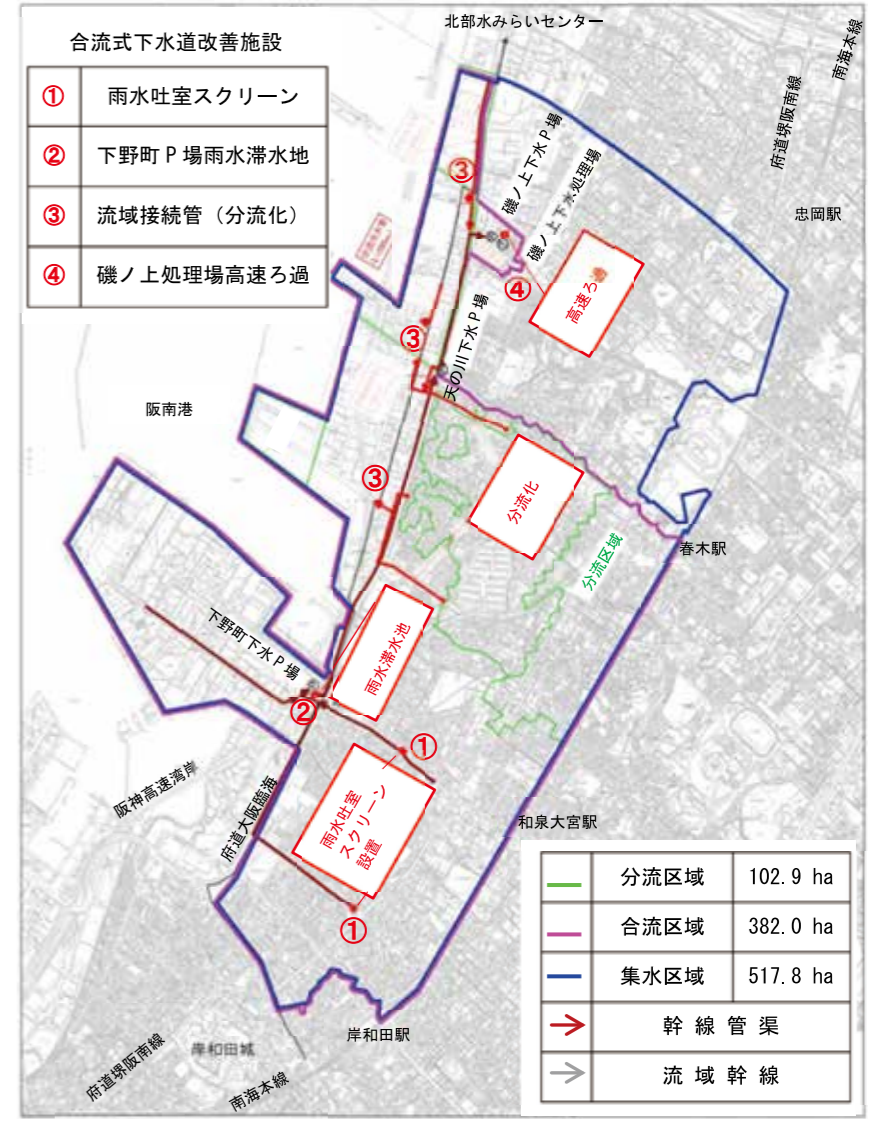
岸和田市では、平成16年度に「合流式下水道緊急改善計画」を策定し、その後数回の変更を経て平成24年度に最終計画を策定しました。

平成25年度に事業完了し、国や大阪府との調整を経て各改善施設について順次供用開始に至りました。

本事業により汚濁負荷量の削減、公共用水域への放流回数の半減、夾雑物の削除など緊急性や効果性の高い総合的な対策を実施でき、公衆安全衛生上のさらなる改善に寄与することができます。

事業の詳細は①沼町および下野町二箇所の雨水吐室にスクリーンを設置することによる夾雑物除去、②下野町下水ポンプ場内に雨水滞水池を設けることによる放流回数削減、③合流区域の分流化(区域内分流整備および流域接続管整備)による汚濁負荷量削減、④磯ノ上下水処理場の高速ろ過整備による汚濁負荷量削減を実現するものです。

今後は当該施設の安定した運用を推進し事後評価により、事業の費用対効果を検証する予定です。



雨水滞水池(下野町ポンプ場)



高速ろ過施設(磯ノ上下水処理場)

下水処理場ではシンボルツリーの 開花時期に合わせて一般公開を行っています

大阪市では、市民の皆さんに親しまれる下水処理場をめざして、花の咲く木を中心とした各下水処理場のシンボルツリーを決め、四季折々の花を植栽して、緑化を行っています。シンボルツリーの開花時期には、下水処理場の一般公開を行って市民の皆さまに楽しんでいただいております。

最近開催した一般公開にご来場いただきました、市民の皆さまからのご感想の一部をここに紹介したいと思います。

●津守処理場 平成27年4月の一般公開

「施設の中をみせていただけて、とても面白かったです。つつじも良かったです。職員さんも親切で良かったです。ありがとうございました」。

「つつじの花が満開でお天気もよきやされました。下水の仕組み等考える良い機会となりありがとうございました」。

「前回いただいたつつじ大きくなりました。いつもありがとうございます」。

●住之江処理場 平成27年5月の一般公開

「バラがきれいだった」。

「バラを見させて頂けただけでなく、色んな催しを企画頂いており楽しませていただきました。また来年もお願いします」。

「施設見学の案内の方が、わかりやすく話をしてくれて、下水処理に対する知識が広がりました」。

「水をきれいにするためにたくさんの工程があることを知った。水を汚さない環境に気をつけ生活することが大切だと知った。本日は勉強になりました。ありがとうございました」。

「水をきれいにするのに大変な時間がかかり、そのためにたくさんの方が頑張ってくれている、ありがたいと思いました」。

これらの声から、下水処理場の一般公開は、市民の皆さまが下水道事業に対するご理解を深めていただく大変貴重な機会になっているものと思われま。今後も工夫を凝らした色んな催しを予定していますので、皆様の参加をお待ちしています。

※一般公開の情報については、大阪市建設局のホームページ等をご覧ください。



シンボルツリー (一覧)

処理場名	主木名	開花時期
大野	ウメ	2月
海老江	ツバキ	2月～4月
平野	ジンチョウゲ	3月
十八条	レンギョウ	3月～4月
中浜	サクラ	4月
津守	ヒラドツツジ	4月～5月
放出	ヒラドツツジ	4月～5月
住之江	バラ	5月～6月 10月～11月
千島	ノムラモミジ	(春～秋)
市岡	サルスベリ	7月～9月
今福	キンモクセイ	9月
此花	サザンカ	12月～2月

下水道展 '15に出展しました

下水道関係者が一堂に会し、最新の下水道技術や情報に触れるとともに交流を深める、下水道界における最大級の展示会「下水道展 '15」が7月28日(火)～31日(金)の4日間、東京ビックサイトで開催されました。この下水道展は、下水道事業に直接携わる事のない一般の方々にもイベントなどを通じて下水道の事を理解いただく場でもあり、期間内には約92,000人ももの来場者で賑わいました。

当センターは、下水道事業の持続・発展の一助となるべく、昨年度に引き続き出展しました。市町村への支援事業などを紹介するブースでは、国・地方公共団体の方や下水道関連団体、企業の皆様のほか、子ども連れの家族までご来場いただきました。

下水道展には、一般の方でも無料で来場できます。来年度は、名古屋ポートメッセで開催される予定です。






紙面に関するご意見・ご感想をお聞かせください

「Mer」では、大阪府下を中心とした下水道情報を織り交ぜながら、水そのものや水環境、都市環境、水にかかる生産活動などに関する幅広い分野の情報を掲載しております。当センターでは、この「Mer」のより一層の紙面充実を図るため、皆様のご意見・ご感想をお待ちしております。関心を持った記事や取り上げてほしい内容・場所・地域などをご記入ください。

応募方法 メール・FAX・ホームページにて
 メール: info@owesa.jp
 FAX: 06-4963-2095

都市技術センター

本書を作成するにあたって、参考にさせていただいた資料一覧

- 大阪府パンフレット「大阪府防災情報システム」
- 大阪府危機管理室パンフレット「おおさか防災ネット」
- 財団法人マルチメディア振興センター公共情報コムズセンター パンフレット「公共情報コムズ」
- 大阪府ウェブサイト
- 内閣府ウェブサイト

- おおさか減災プロジェクトウェブサイト
- 東横堀川水辺再生協議会e-よこ会ウェブサイト
- e-よこ会「東横堀水辺新聞」
- e-よこ会パンフレット「e-よこ道通2015」 など